

鹿児島の地質16 **世界遺産の島・屋久島の誕生**

地質担当 鈴木 敏之

屋久島は九州本土最南端佐多岬から南へ約60kmの海上にあり、1993（平成5）年に冷温帯から亜熱帯までの連続した植生の分布が評価されて日本初の世界自然遺産に登録されました。周囲約130kmの円形に近い島で、九州最高峰の宮之浦岳（1936m）をはじめ海拔1000m以上の山々が連なり、自然豊かな屋久島は地質の面からも今、注目を集めています。

屋久島の基盤をつくる岩石は、島を取り囲むように分布する砂岩や泥岩などの堆積岩（日向層群（熊毛層群））です。今から約4000万年前に大陸から運ばれてきた土砂が海底にたまって地層をつくり、その後の地震による地滑りやプレート沈み込み等によって地層がしゅう曲したり、断ち切られたりして、複雑な



しゅう曲した地層（泊川）

構造になりました。その頃はまだ現在の屋久島は誕生していません。

その後、約1500万年前に地下深くで活動が活発になったマグマが堆積岩の中に入りこみ、ゆっくり冷却して巨大な花こう岩となり、少しずつ上昇して堆積岩を押し上げました。また、花こう岩の貫入の際の熱や摩擦で、接触していた堆積岩は変成してホルンフェルスという硬い変成岩に変わっています。

屋久島花こう岩は、岩石を構成する石英や黒雲母などの鉱物がよく成長してはつきりと確認できます。また、数cmもある正長石巨晶が見られるのも特徴の一つです。永田浜は花こう岩が風化して運ばれてできた砂浜です。



風化した花こう岩がたまった砂浜（永田浜）

鹿児島の動物20

^{ギョ}魚っ！透明なシロウオ

動物担当 山田島 崇文

ハゼ科のシロウオは、骨や内臓が透けて見える透明な魚です。体表の色素が乏しいため、透明に見えるのです。中央にシャボン玉のような丸い



写真1 シロウオ

ものがありますが、これはうきぶくろです。また不思議なことに鱗うろこがありません。どうして鱗うろこがないのかはいまだに謎のままです。

シロウオは、川で生まれ、海で成長した後、再び川に戻って産卵する魚（遡河回遊魚そが）で、同じように川と海を行き来するものにサケやシヤマモがいます。シロウオの場合、産卵のため川に戻ってくる（遡上そじょう）のは、おおむね2～4月で、県内では、川内川など薩摩半島北西部の川や志布志市前川などで遡上が見られます。

この期間に全国各地でシロウオ漁が行われ

ますが、特に有名なのは、江戸時代から続いている福岡市室見川のシロウオ漁です。梁とよばれるわなを仕掛けて獲ります。獲れたシロウオは、生きたまま酢醤油につけた踊り食いや、天ぷら、卵とじなどにして食べます。

写真2 シロウオ漁の梁やな

また、メバル釣り

の餌としても利用されます。春のわずかな間しか食べることができず、漁期以外は梁も撤去されてしまうことから、シロウオは春の風物詩といわれています。なお県内では、長島などで小規模な漁が行われている程度です。

なお、似た名前の魚にシラウオ科のシラウオがいますが、こちらは頭の先が尖っているのが特徴で、県内には分布していません。